

深 海 からの エスコート

黒川 文



目次

1. 出逢い	
1. 出逢い	3
2. 旧日本軍	
2. 旧日本軍	9
3. 洋上へ	
3. 洋上へ	15
4. 深海からのエスコート	
4. 深海からのエスコート	23

1. 出逢い

1. 出逢い

大海原を快調に進んでいると、ブリッジ前方の海面が黒くなっているように見えた。何か海面下にいるようだった。波間から黒い変色部分が見え隠れした。

わたしは、航海士と共にレーダー画面を確認したが、ここには映っていなかった。波より低いのか、金属ではないかのどちらかだと思ったが、いずれにせよ、回避しないと事故になる可能性があった。

本船「さん・おいる二号」はクウェートからシンガポールへ原油十万吨を積んでインド洋上を航行中だった。もっとも、運輸会社のチャーター船で乗組員の国籍もバラバラで日本人はわたしだけだった。わたしはプロペラを反転させて減速することにした。機関室にも機関士がいるが、スロットル操作はブリッジから遠隔操作できる様になっていた。

「全速後進..... 機関回転数確認」

徐々に回転数が落ちていった。

機関の回転数が落ちて減速をはじめると、船全体にブレーキが掛かり少し前のめりになった。その後、舵を切ろうとして、わたしは航海士の顔を見た。船同士が出会ったときには国際ルールでは右側に舵を切ることになっているが、その障害物がどちらに動いているか分からなかったのだ。距離は十キロ以上と思われ双眼鏡で見る限り浮かんでいるだけのように思えた。だが、航海士が変なことを言い出した。

「船長、潮を吹いています。鯨じゃないでしょうか？」

「ふむ」

「吹いているところが頭ではないでしょうか」

大きさから言って鯨ではないと思ったが、制動を掛けている以上、どちらかに舵を切らなければならない。わたしは航海士の意見に従った。——「鯨」は右に移動しているように見えた。

「航海士、取り舵」

と、わたしは告げて、舵を左に切った。

「了解、取り舵、..... 確認」

航海士は、モニターに示された舵の角度をチェックした。

さん・おいる二号が、やがて機関が反転を始めプロペラを逆回転させ、舵を左に切っても障害物まで十キロしかなく回避できるかどうかギリギリのタイミングだった。相手が動かなければ衝突の可能性もあった。

「船長、障害物が大きくなりました。何か所からも潮を吹いています」

「何だって」

わたしも双眼鏡を覗いた。黒い海面上に白い波しぶきを上げ、黒い船体の三、四箇所から白い気体を吹き上げているように見えた。それに、鯨にしては大きすぎた。この船の全長も二百メートルもあるが、それに匹敵するサイズだ。転覆した船体のようにも思えた。

やがて、接近すると、それが旧式の潜水艦であることがわかった。ブリッジの前方に小口径の火砲を備えているし、後部には二十五ミリ機銃が備わっていた。

距離が五百メートルになり、わたしは衝突を予想し、全員にライフジャケットの装着を命じた。

そのとき、潜水艦は悠々と向きを変え、本船の横に移動した。船体はこの船の半分くらいの長さがあった。一瞬アメリカの潜水艦かと思ったが、原子力潜水艦がこんなところに浮上しているわけがない。

航海士が潜水艦のブリッジに人が立っていることを告げた。わたしが双眼鏡で見ると艦長らしき男と、士官がいた。こっちに向けて発光信号を送ってきた。二十年以上前に廃止されたモールス信号だった。通信士がそれを読み取った。

「不明、U、L、A、不明、不明、不明、不明、I、不明、J、A、不明、不明、以上です。何かの暗号でしょうか」

首をかしげた。

わたしは、艦長が敬礼するのを見てハッと気付いた。

「暗号じゃない、和文モールス信号だ。コウカイノアンゼンライノル」

「何ですって？」

通信士は不思議そうな目でわたしの顔を覗き込んだ。わたしは即座に英訳した。

この船はパナマ船籍だったが、所有者は日本の運輸会社で英語と共にひらがなの名前が書かれていた。わたしは意志が伝わったことを示すために汽笛を鳴らすよう指示した。

潜水艦の艦長はこっちに向かって右手で合図した後、下に降りていった。ブリッジに艦番号があった、インド海軍の潜水艦のようにも見えたが、その下の塗装のはげた場所に艦番号「713」と数字が入っていたのがうっすらと読み取れた。潜水艦は真っ黒の煙を噴き上げた。機関を停止させたようだった。そして、またゆうゆうと海中へと潜っていった。

わたしは、ほっとして再び元の速度に戻すよう機関室に指示を出した。

シンガポールに無事に着き、わたしが雇われている運航会社の事務所に顔を出した。この会社は一種の人材派遣会社のような所で、タンカーや貨物などの運送会社から仕事を請け負い、船長と航海士などの運航スタッフを派遣している。わたしもその中の一人だった。給料は昔ほどよくはなく、従って日本人はわたしの他にはいない。それでも、辞められないのは、船を下りて他の仕事をする自信がなかったからだった。

「ご苦労様、さん・おいる二号にトラブルはなかったですか」

支社長がねぎらってくれた。

「ええ、順調でしたよ」

本当は、順調でもなかったが取り立てて報告するレベルでもないので黙っていた。

「あの船は原油と一緒に横浜まで向かうことになりました。日本の石油会社と荷主とで商談が成立したそうです」

「そうですか」

わたしは、久しぶりの日本航路だと心が逸った。

「でも、船長には悪いんですが、別の運送会社が受注したようです。横浜までは彼らが乗り組むそうです」

「まあ、いつものことですね」

「それで次の仕事なのですが、まだ、未定ですが受注確実なので一週間ほどこちらにとどまっていただけませんか」

これも、いつものことだった。

2. 旧日本軍

2. 旧日本軍

夜、暇になったわたしは街に出た。屋台の賑やかさが苦手であまり人のいない酒場に行った。カウンターに座り、ウイスキーをグラスでもらった。ちびり、ちびり飲んでいると、もうひとりの客がカウンターに座って、ビールを注文した。

わたしはその男が一見して船乗りだとわかった。単に日焼けしているだけでなく、同業者にしかわからないだろう。その動作ににじみ出るものなのだ。彼とバーテンダーはアジア訛りの英語で会話をしていた。

生粋の英語と呼べるものはイギリス人か、アメリカ北東部の人間だが、むしろ現代では少数派で英語の定義すら定かではない。シャーロック・ホームズは言葉を聞いただけで、住んでいる町の町名と番地まで当ててしまうほどだ。それほど、各地域の訛りは強くにじみ出ている。

イギリス人の友人に「どの英語が正解なのか？」と聞いたら、女王陛下の英語が標準だと答えたくらいだ。もちろん彼の冗談に決まっていたのだが。

彼らの会話が何気なくわたしの耳に入ってきて、その中に何か所か馴染みのある地名があった。

「失礼ですが、船に乗っておられるんですか。ふと、馴染みのある地名が耳に入ったので」

そう尋ねると男は一瞬怪訝そうな表情になり、次の瞬間すぐにこちらも船乗りであると気づいたみたいだった。

「あ、ええ。ペルシャ湾からシンガポールまでの航路に乗り組んでいます。一等航海士です」

「ほう。わたしも、今日、クウェートからここに来たばかりです。船長をしています。雇われですが」

「いやいや、今時はみな、雇われの身ですよ。あなた、ひょっとして日本の方ですか？」

「はい」

ここから日本語の会話になった。彼は六十前だと言った。

わたしが、インド洋での不思議な潜水艦の話をする、彼も見たことがあると言った。滅多に現れるものではなく、彼もこの航路に二十年近く従事しているが、見たのは一度だけらしくった。しかし、この潜水艦を個人的に研究していると言った。

「船体に数字がなかったですか」

彼は何か知っていると言わんばかりの態度で尋ねた。

「ええ、艦橋に713と書いてました」

わたしがそう答えると彼は満足げにうなずいた。

「わたしも不思議に思って日本に帰ったときに調べたことがあるんです」

「ほう！」

「昭和二十年にトラック島周辺で行方不明になった潜水艦でイ13と言うのがあるんですよ。駆逐艦ローレンス・C・テイラーに撃沈されたことになっているんですが、アメリカ軍も攻撃の後、最後まで未確認で日本側でも亡失、除籍処分になっています」

「つまり、撃沈されたのではなく行方不明になったと？」

「そうです」

「では、わたしが見た713がイ13の間違いだった？」

わたしには信じられなかった。いくらアルコールが入っていても冗談が過ぎた。七十数年前の艦が動いているわけがない。わたしがそう言うと、男は首を横に振った。

「実際には中古の軍艦が今でもアジアで使われています。つい最近もインド海軍から第二次大戦中のアメリカ潜水艦が廃棄されるのを機にアメリカの博物館に寄贈されました。潜水艦の運用はどこの国も機密だから退役しないと実態はわからないのです」

「じゃあ、そのイ13もどこかの海軍だと言うのですか？」

男はにっこり笑った。彼も確信はないらしかった。

「でも、士官が打ってきたのは和文モールス信号でした」

わたしがそう言うと男は目を輝かせた。

「やはり、内容は日本語ですよ？」

「ええ、航海の安全を祈る、でした」

「わたしが出会ったときは、前方を注意せよ、でした。無線でインドネシア海軍に連絡したら、海賊の情報を教えてくれて進路を変更したんです」

「ほう！」

「わたしが思うに、イ13はトラック島ではなくシンガポール方面に出撃したんじゃないかと思うのです。トラック島は偽装工作で、本当はシンガポール方面からの物資の流れを絶やさないための哨戒任務だったわけです。それがアメリカ軍の爆撃をかわしてこの海域の任務についた」

「何ですって、まさか、潜ったまま任務の解除命令がないから、終戦後そのままここにいらるとも言うんじゃないでしょうね」

男は手のひらで顔の汗をぬぐって、不敵な笑みを浮かべた。

「でもあなただったらどうします？」

「それは……」

「ね、会社の指示がなければ洋上で待機しているでしょう」

わたしは、いくつかの問題点を男にぶつけた。燃料や水、食料の補給、交換部品の確保などである。それに、人間が三ヶ月以上洋上にいるのは困難なこと。この問いにも男は不敵な笑みを浮かべた。

「でもあなただったらどうします？」

「それは……」

「ね、どうとでもなるでしょう」

確かに、やる気さえあればどうとでもなりそうに思えた。船の運航に基地が絶対に必要とは言い切れない。現にさん・おいる2号も、手配していた燃料が港に届いていなかったり、食料がいつの間にか奪われていたこともあったが、知恵を絞れば何とかあったのだ。正式に入港しなくても上陸さえすれば、地元業者から備品を買うことは可能だし、船舶用機器も日用品も手に入らないものはないだろう。さすがに魚雷などは手に入らないだろうが、砲弾や機銃弾は手に入る国もある。わたしはあの潜水艦が潜航前に真っ黒の煙を噴かし上げたことを思い出した。パッキンや燃料が正規のものでないから異常燃焼を起こしていると思われた。

「仮に備品の供給を受けられたとして支払いはどうするんですか。まさか金塊を積んでいたとでも言うんじゃないでしょうね」

「まあ、仮の話ですが、日本で自衛隊と海軍といえははっきり区別できますよね」

「ええ」

「でも、外国で英語だと同じニュアンスだし、ネイビーといえはそのまま海上自衛隊も意味するんです。国際常識です」

「そうですね」

「彼らは日本海軍の正規の身分証も、命令書も持っています。だから、請求書を送れと言われれば誰しも呉か横須賀の潜水艦基地に請求書を回すでしょう」

「それもそうですね」

納得は出来なかったが反論も出来なかった。それで備品の供給を受けながら活動していたとも考えられないし、海上自衛隊がそんな請求書に応じるとも思えなかったが、積極的に拒否できるか疑問だった。旧日本軍のことに關しては誰もあまりことを構えないからだ。

「だとしたら、本当に彼ら、いや、あの潜水艦は日本海軍のものだと言うんですね」

男はまた、にっこり笑ってうなずいた。

「じゃあ、哨戒任務でわれわれを見守ってくれた理由がわかりましたが……」

「そうです。彼らの任務を解いてあげないとならないんですよ、年齢を考えてください」

男は完全に彼らを日本海軍の生き残りだと決めつけていたし、その、言葉にも段々と熱がこもってきた。

「それはそうです。でも、……」

「彼らはおそらく、現在の無線機を持っていません。衛星回線もです。だから発光信号を使っている。それに、海上自衛隊はこの海域に来ることが出来ません。だから司令部から任務の解除命令を伝えることは出来ないのです」

「では？」

「こうして日本船の船乗りたちしかいないのですよ。今度、日本船に乗る機会があったらこちらからも、発光信号を出してあげて欲しいのです。そう思ってわたしも、来る度にシンガポールにとどまって酒場にいるんです」

わたしはホテルに帰った後、あの潜水艦のブリッジにいた艦長を思い出した。酒場の男の言うことが本当なら九十才以上のはずだった。士官も八十代後半から九十代だろう。階級が大佐クラスなら百才を超えているかも知れない。あのときのラダーを下りる身のこなしから考えるとそれはあり得なかった。

まるっきり、狐につままれた思いだった。わたしは酔いに任せてベッドに身を沈めた。

3. 洋上へ

3. 洋上へ

三日後、意外と早く洋上に出ることになった。日本からアラブ首長国連邦アブダビに向かう空荷のタンカー日油丸の運行を中継地である、ここシンガポールから請け負うことになったのだ。シンガポールにある会社の事務所で乗員名簿と日程表を受け取り早速港に赴いた。その日の午後、日油丸は十万トンの船体をタグボートにエスコートされて入港した。下りてくる乗員たちと軽く挨拶して、わたしは新しい乗員と乗り込んだ。わたしは自身の目でレーダーや航海コンピュータのチェックを行い、ディーゼルエンジンや舵、油圧ポンプ類のチェックを行った。タンクの中には海水が入っている。空だと船が浮き上がりプロペラが海面上に出てしまうのだ。一通りの船内のチェックがすむとブリッジから船長室に移り、食料や水などの荷物の積み込みが終わるのを待った。乗員名簿を見ると、今回も日本人はわたしだけだった。

夜間に日油丸は出航した。日程がつまっているせいもあったが、煙突からのばい煙が黒いのが少し気になっていたからだ。外国ではあまり問題にならないが、日本なら機関を停止させられるのだ。今回は本船が日本国旗を掲げていることから、あまり煙が目立たない夜のうちに離港させることを決めた。わたしの指示で日油丸はタグボート二隻に囲まれて離岸した。

ブリッジには年老いたパイロット（水先案内人）がきて舵を握った。離岸してから沖合までの舵を任せる仕事だ。喫水が深いので、水深の浅いところで座礁しないように真剣な眼差しで、海図と景色とを照合しながらタグボートに無線機で指示を飛ばしていた。シンガポール沖合は地形が複雑で良港であると同時に難所でもあった。

沖合に出て役目を終えると、老パイロットはタグボートに移り帰ろうとして、ブリッジの扉の所で少し立ち止まった。

「船長は日本人ですか」

「そうです」

日本船籍でも日本人乗組員は少なく、いても、見掛けだけではわからない。パイロットの老人は時間がないにもかかわらず、少し考えて、シンガポール訛りの英語で話した。「この海域に出る、化け物をご存じですか」

「化け物ですか」

老人はダイナソーという単語を使った。恐竜という意味だが、三億年前に絶滅しているから現実的な言葉ではない。わたしは一瞬迷った後、イ13号のことを思い出した。

「ひょっとして黒い煙を噴き上げるやつですか」

「やはり船長も見たんですか」

「ええ、あなたも見たんですか」

「何度か……水先案内に乗り組んだ船が、テロリストに襲われそうになったときに助けられたことがあるんです。でも、何者かわかりませんでした」

「助けられたですって、武器を積んでいたんですか」

「わかりません、ただのマシンガンかも知れないし、今となっては確認しようがありません、それに《アンド》……」

その後の老人の言葉は訛りがきつくなり、聞き取れなくなった。タグボートから無線で何度も引き上げるよう催促されて、老人は名残惜しそうに日油丸のタラップから飛び移った。タグボートが十分距離を取ったのを見て、わたしは機関全速を指示した。月夜の中、日油丸は徐々に加速し、十ノットで一旦加速をやめてそのままマラッカ海峡を通過した。

昔から今まで海賊の多い海域でもあり、わたしは機関要員以外の全員を見張りに立たせた。ときどき見える小型船舶の陰に緊張感が走った。マレーシア、インドネシア、タイ国の沿岸警備隊が監視しているがお互いの境界線の当たりがもっとも危険だった。どこが境界なのかは当局は明らかにしていないが海賊の方はよく心得ていて、相手国の沿岸警備隊が追ってこられないような位置に出没していた。

皮肉にも海賊の一番のターゲットは日の丸の旗だ。非武装なのをいいことに格好の獲物になる。わたしはこれまで日本籍の船には余り乗っていなかった。数が少ない為でもあったし、この海域で物騒なのを知っていたこともあった。因みに安全なのはアメリカ船だ。下手に強盗でもしようものなら、三日と経たない内に海賊の拠点の村に海兵隊が乗り込んできて皆殺しにされる、と信じられている。正に力は正義なりの海域だった。

三時間ほど経過し、ペナン島沖合を通過してアンダマン海に差し掛かった。

タンカー前方の見張りに付いていた乗組員から無線が入った。

——前方に、小型船舶が見えます。

今夜、十度目の報告だった。わたしは神経をとがらせながら航跡の方向を確認した。その小型船はレーダーには映っていなかった。元々小型船舶は映らないことが多いが、衝突防止のために電波反射機を取り付けている。この小型船舶は故意に外している可能性があった。

——航跡は見えません。こちらに向かっている様に見えます。

わたしはブリッジの外に出て双眼鏡でのぞいた。空が白みかけていて、全長二〇メートルくらいの小型船が見えた。輸送船にしては小さいし、地元の漁船にしてはやや大きい、もっとも判断するに中途半端な大きさだった。

相手が海賊の時は、喫水が深いと海面からの高さが低くなって乗り移りやすく危険だった。このときもタンクにはバラスト水を積んでいて半分まで水面下にあった。それでも海面から二十メートル以上はあり、ラダーをつけないと、通常の装備では乗り移ることは出来ないが油断は出来ない。その気になれば縄ばしごでも何でも使えるのだ。

わたしは速度を上げるよう指示した。最大船速十八ノットで逃げ切る気だった。

小型船は一旦接近した後、様子を見るように日油丸の横を五百メートルほどの距離で通過し、日油丸の航跡（ウェーキ）に差し掛かった当たりで舵を切って反転した。この動作はブリッジのレーダーが捉えていた。日油丸の速度は十五ノットになっていた。わたしは右舷の見張りに報告を求めた。

——本船と並行して航行しています。乗組員は十人くらいと思います。

漁船にしては多すぎる人数だった。わたしは航海士に舵を任せ、無線でタイ国沿岸警備隊に通報しようとした。

——ガガー、ピー、プッ。

ダイヤルを回しても、周波数を捉えられなかった。焦れば焦るほど目的の周波数から遠ざかる。

「船長、衛星電話の方がいいのでは？」

航海士はそう声を掛けた。わたしはうなずいて、脇にある電話機を取った。だが、通話音が断続した。つながったかと思うとまた切れた。通信衛星にも見放された気分だった。アンテナが揺れているのかも知れなかったが、船の姿勢もまだ安定しきっていなかった。

——船長、接近してきました。武器を所持している様です。

また、右舷から無線連絡が入った。わたしは武器の種類も確認したかったが、安全を優先して、彼に左舷側に避難するよう指示した。これで見張りはレーダーだけになった。速度はまだ十六ノットに達したところだった。海賊対策として、消火用放水銃で敵に水を浴びせることも出来るが、乗組員を銃口にさらすことになるし、少しためらわれた。

船はこれからニコバル諸島脇を通過するために水深の浅い海域は通れなかった。左舷にスマトラ島バンダアチェを見るコースだ。小型船は追跡になれているらしく、日油丸の行き先を正確に追尾してきた。距離も段々と近くなってきた。百メートル以内になれば自動小銃すら有効な武器になってしまうのだ。わたしは航路からそれない程度に進路を左右に振ったが、十万トンのタンカーののろい動きに比べ小型船の敏捷性ははるかに優れていた。

——バラスト水など積まずに、喫水を浅くしておいた方がよかった。

わたしはそんな後悔をした。海賊の大半は乗組員から金品を奪ったりという犯行だが、タンカーや貨物船に関しては積み荷が目当てだ。敵はこのタンカーに原油を満載していると勘違いしているようだった。多分、船ごと乗っ取り、どこかに売り飛ばすのだろう。船には保険が掛かっていたが、わたしたちの命の保証はなかった。船長の責任上乗組員たちをどこかに逃がさなければならない。漠然とそんな考えが脳裏をよぎった。

日が昇ってきた。わたしは危険を感じた。夜間なら長距離射撃の心配はないが、この状態だとロケット弾で目視射撃されるおそれがあった。航海士も舵を握る手に汗を滲ませていた。

小型船はなおも接近した。一人が銃を上に向けて撃つのが見えた。音は小さかったが光と煙が見えた。

「船長、自動小銃のようです。何か叫んでいますが、言葉はわかりません」

航海士はそう言った。彼はタイ人で、若い頃に海軍にいたことがあるらしかった。

「言葉？」

「この近辺だと思いますが、地方の部族だと思います」

「言葉はわからなくても、友好的ではなさそうだ」

「そう思います。体当たりしますか？」

航海士は大胆なことを言った。確かに十万トンの船体を近づけるだけでも威嚇効果はありそうにおもえた。うまく行けば転覆させられるかも知れない。だが、過失致傷罪ではすみそうにない気がした。少しためらって腹をくくった。

「よし、面舵」

「了解、面舵一杯」

航海士はわたしの指示で舵を思いっきり右に切った。油圧駆動で舵は切れているはずだったが、十万トンの船体がそんなに軽く振り回せる訳がなかった。この舵がきいてくるのは十分くらい後だし、実際に方向が変わるのに三十分くらいは掛かるのだ。

そんなブリッジでの他愛もない焦りとはよそに、小型船は悠々と近づいてきた。ときどき発砲もして手で停止を命じているように見えた。

「へえ、自動小銃って火花が星形に見えるんだな」

わたしは強がって軽口を叩いた。

「ええ、フラッシュハイダーの形状にもよりますが、あんな感じです」

航海士も強がっていたが、わたしはレバーを回して機関を停止させた。機関室から電話が入った。

——何事ですか、全速航行中ですよ。

「すまない、海賊だ。残念だが停船する」

「了解です」

機関士も残念そうにつぶやいた。

急に静けさが拡がり、波を切る音と銃撃音だけが聞こえてきた。

覚悟した瞬間、また、銃撃された。今度は近い距離からブリッジを狙われた。船が機関を止めても速度はまだまだすぐには落ちない。プロペラを逆回転させなければ半日は動いているが、そこまでして停船するのも、正直なところしゃくだったのだ。

「船尾の国旗を降ろして白旗を掲げよう」

「いいんですか？」

「このまま意志を伝えないと危険だし、せめて旗だけでも回収したい」

「元軍人として気持ちはわかりますが、抵抗しませんか？」

「君たちの命を危険にはさせない。誰一人もだ」

「わかりました。わたしが降ろしてきます」

「うん、左舷から近づいてくれ」

4. 深海からのエスコート

4. 深海からのエスコート

航海士が扉に近づいたとき、また、無線が入った。——前方からもう一隻接近します。わたしは、仲間がハイエナのように集まってきたのかと思った。航海士に外に出るなと手で合図した。姿勢を低くしてレーダー画面を見るとさっきまでいなかった場所にもう一隻増えていた。しかしこっちの船体はかなり大きかった。

ズーン、と大きな衝撃音がした。

わたしは窓から前方を見た。黒い船体が波を切って進んでいた。海軍の駆逐艦の様に思えた。

「船長、多分五インチ砲の音です」

「五インチ砲、駆逐艦か」

発砲は威嚇だったと見えて、日油丸の右舷五百メートル、小型船の前方に水柱が立った。どちらを狙ったのかわからない撃ち方だった。だが、水柱にあおられた小型船の中ではパニックが起こり、一人があわてて操舵し小型船を反転させて速度を上げて逃げた。駆逐艦はしばらく追尾し、日油丸の後方一キロ地点でまた反転し、戻ってきた。

わたしはその船形を見てあっと思った。この間に会ったイ13だった。シュノーケルから黒い煙を噴きながら航行し、船上に小型砲……後で調べたところによると十四センチ砲……を備えていた。ブリッジに人が立っていた。士官が発光信号機を操った。

「船長、何でしょう？」

「和文モールス信号だ。キカンヲゴエイヌル」

「何ですって？」

「護衛してくれるらしい、こっちに発光信号機はあったかな」

「倉庫を探してきます」

航海士はすぐに古びた発光信号機を持ってきた。投光器の前にシャッターを備え、モールス信号に合わせて開閉する方式の通信手段である。わたしはシャッターに手を掛けた。

——護衛感謝します。貴艦の所属を教えて欲しい。

——機密である。

わたしはシンガポールの酒場であった男の言葉を思い出した。本当にイ13号なのか信じられない気持ちだった。ブリッジには確かにあのとき「713」と思った数字が「イ13」と読み取れた。

しかし、双眼鏡越しだが目の前の艦長と士官の年齢が九十を越えているとは思えなかった。わたしは近づいて確かめてみたかった。

——ウイスキーを差し入れしたい。

そう、信号を送った。

——厚意謝すれど、本艦は機密装備ゆえ接近は禁ずる。と返事が来た。

わたしは、本物のイ13の様な気がしてきた。だとしたら、彼らの年齢と、そして、当初108名だった乗組員のうち何人生き残っているのかが知りたかった。しかし、彼らの口は堅かった。

イ13にエスコートされ日油丸は十ノットで航行を続けた。イ13も同じように付いてきていた。

海峡を通過し、水深の浅いところを抜けるとインド洋だった。イ13から再び信号を送ってきた。

——この先はインド洋である。航海の安全を祈る。

彼らを見ると、すでに潜航準備に掛かっていた。もうお別れかと思うと寂しかった。

わたしはもう一度、信号を送った。

——戦争は終わりました。

しかし、意味は通じなかった。

——早くそうなるよう、我々も努力する。油送業務ご苦労である。

「船長、彼らは何と言っているんですか？」

航海士が尋ねた。

「いや、わからない」

わたしは、彼の方を見ずに答えた。もし、イ13号だったとしても戦争が終わりましなどと言ったことが恥ずかしかった。そう、終わってなどいない。

双眼鏡越しに見るイ13のブリッジ上で、艦長と士官は日油丸船尾の国旗に向かって敬礼をした。そして軽やかにラダーを下りると、ハッチを閉じ、真っ黒の煙を噴かし上げて潜航をはじめた。

わたしは、その航跡が消えるのを黙って見送った。 了

深海からのエスコート

著 黒川文

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
